復刊の辭

竹田復

我が漢文學會會報は、昭和十七年度で休刊のやむなきに至つたが、茲に復刊第一號を發行し得ることになつたのは、學界のため御同慶に堪えない。中國に關する學會は、一昨年の秋、綜合されて全國的の中國學會が成立し、多年の懸案が實現され、年一回の年報が發刊の運びになつたことは、既に御承知の如くである。しかし中國學會の年報は、經費の關係から紙數にも制限があり、多數會員の要望に滿足を與え得ない現狀である。從つて研究室を中心とする研究機關を有する各地の大學では、その所屬研究者の研究を發表し得る爲、何等かの方法が講じられねばならない。我が漢文學會では、世の秩序の恢復とともに、會員諸君の旺盛な攻究精神に答えるため、發表の方法などに就いて幾度か會合考究の結果、年一回の研究發表會と相俟つて、會報の復刊を企圖し、今回漸くその實現を見るに至つた。是れ偏えに會員諸君の熱誠な後援に依るもので、深く感謝する次第である。

戰爭を契機として、中國學問研究の方向は、一轉機を劃しつつあるものと思う。思想史的研究にせよ、經子學・文學・語學の研究にせよ、何れも生きた中國人の所產である以上、先づ人間の生き方に觸れ、その考え方をつきとめ、それから表われる抽象的具體的事象へと歩みを進むべきで、茲に新しい研究の方法も發見され、研究の態度も確立される。中國の學問のすべては、人間の探究である。すべては彼等の把捉した眞の生命・眞の實在が基盤となり、その上にうち立てられたものといつても過言ではない。しからばその眞なるものは何か。いかに把捉したか。それが解明されてこそ學的攻究も可能である。存在をそのまま對象とすることは、戒しめねばならない。この方法はそのまま日本漢文學の研究に轉用される。日本漢文學の研究は、殆んど未開拓のまま取り殘されている。この點は我研究室としては、是非手を着けねばならない。國文・國語乃至は日本史と左提右携、意義深い文化財を今日に生かすことに努力したい。

この復刊によつて、會員諸君の眞摯熱烈な研究意欲を、一部分でも充し得たことを心から喜び、今後の發展を希望してやまないのである。